

日々の聖句

7月 聖化



互いの重荷を負い合いなさい。そうすれば、
キリストの律法を成就することになります。

ガラテヤ 6:2

Bear one another's burdens, and so fulfill the law of
Christ.

Galatians 6:2



神は第七日を祝福し、この日を聖なるものとされた。(3)

「聖別」とは、神があるものを一般の用途からとりわけ、特別な目的のために用いることを言います。キリスト者が「聖別」される必要があるのは、この世が罪と汚れに染まっているからで、通常「聖別」というと、「罪と汚れからの聖別」を意味します。ところが、きょうの箇所は、罪が世に入る以前にも、神が「日」と「時」を聖別されたことが書かれています。このことは、「聖別」には、「罪と汚れからの聖別」だけでなく、さらに霊的な目的に向かつての聖別や神の特別な使命のための聖別があることを教えています。

「聖化」や「聖別」は、私たちが罪から離れること、この世の汚れから遠ざかることだけを求めているわけではありません。それは、「このような

ことをしてはいけない」という禁止の項目だけで成り立つものではなく、神のために何事かを成し遂げるためのものです。聖別は、ものごとを、人間の世界での「善」にとどめておくのではなく、神の目に「聖」なるものへと高めていくことなのです。

聖別や聖化の最終的な対象は「人間」ですが、神はまず「日」と「時」の聖別から始めました。人は時間の中で、その人生の日々の中で聖化されていくからです。しかも、それはただ漫然とした時の流れではなく、聖書で「安息日」と呼ばれ、教会が「主の日」と呼んできた、七日のうちの一、日、神とのまじわりの日と時を守ることによってなのです(出エジプト 31・13)。

祈り 聖なる主よ。私に、日と時を聖別し、聖化の道を歩むことを教えてください。

聖なるものと俗なるもの、また汚れたものとき
よいものとを分け：(10)

旧約時代にはさまざま「聖と俗」、また「汚れたものときよいもの」との区別がありました。それはきわめて具体的で、食べてよいものと、食べてはいけないものまでも定められていました。そうした規定によつて、人々は汚れを避け、きよさを保つことを学んだのです。

旧約の律法には、イスラエルに神の民としての自覚を与え、霊的なものを学ばせるという教育的な目的がありました(ガラテヤ3・24)、律法の細則は同時に人々を束縛するものとなりました。イエス・キリストは律法を完成し、私たちを律法の細則ではなく、「キリストの律法」(第一コリント9・21、ガラテヤ6・2)の下に生きることができるようにしてくださいました。教会

も、異邦人キリスト者が、事細かなユダヤの律法を守る必要のないことを確認しました(使徒15・28〜29)。

けれども、それで聖と俗の区別までもがなくなつたわけではありません。新約聖書は、キリスト者が汚れと不法を捨て義と聖潔を求めべきこと(ローマ6・19、第一テサロニケ4・7、ヘブル12・12)を教えています。

旧約の祭司には「聖なるものと俗なるものとの違いを教え、汚れたものときよいものとの区別を告げ知らせ」る勤めが与えられていました(エゼキエル44・23)。この時代の祭司とされたキリスト者も自らが聖なるものを求めることによつて、人々に聖と俗の区別を示す責任があります。祈り 聖なる主よ。私たちをこの時代の祭司とし、聖と俗の違いを示す者としてください。

あなたがたはわたしの安息日を守り、わたしの聖所を恐れなければならない。(2)

神は、日と時とともに「場所」も聖別しました。主は約束の地全体を主の「住まい」として選び、ご自分の民をそこ導き(出エジプト15・13)、その地を罪によって汚してはならないと命じました。なぜなら、主がそこに宿っておられるからです(民数記35・34)。最初の幕屋と後の神殿は、この主の臨在のしるしでした。幕屋や神殿は聖なるものですが、それよりもさらに聖なるものは主の臨在でした。

ヤコブは主が夢に現れた場所を「神の家」(ベテル)と呼んで記念しました(創世記28・16、19)。主は燃える柴のうちにご自分を現わされたとき、モーセに「あなたの履き物を脱げ。あなたの立っている場所は聖なる地である」(出エジプ

ト3・5)と告げました。幕屋は荒野で作られ、そこを移動しています。これは、ある特定の場所がそれ自体で聖なるものであるというよりは、それを聖別している主の臨在がより聖なるものであることを教えています。たしかに主は特定の場所を聖別しますが、それはかならずしも、エルサレムやゲリジム山である必要はありません。キリストはご自分のからだを神殿と呼び、聖書は教会がキリストのからだであると言っています。さらに主は、主の晩餐のパンを「これはわたしのからだ」と宣言しています。主のからだ、主の臨在のあるところ、そこが今日の聖所です。私たちはこの聖別された場所で主と出会い、主の民として聖別されていくのです。

祈り 聖なる主よ。私を常にあなたの臨在の場所に置いてください。

しかし、主はモーセとアロンに言われた。「あなたがたはわたしを信頼せず、イスラエルの子らの見ている前でわたしが聖であることを現さなかつた。」(12)

モーセは民をエジプトから導き出すという大役を見事に果たしましたが、イスラエルを約束の地に導き入れるという特権を与えられませんでした。それは、人々が荒野の旅に疲れ、「飲み水さえない」と不平を吐いたとき、モーセが「われわれがあなたがたのために水を出さなければならぬのか」と言つて、杖で岩を二度も打ったからでした。主は「岩に命じれば、岩は水を出す」と言われたのに、モーセはそのとおりせず、主が「聖であることを現さなかつた」のです。

モーセには、預言者、また指導者としての権威が与えられていました。杖はその権威の象徴でし

た。主は、その時、モーセにご自分の言葉を与え、それによつて岩から水を出し、人々の必要を満たすのはご自分であり、人は神の言葉によつて生かされていることを示そうとされたのです。

ところが、モーセは民の不平不満に怒りを覚え、彼らを黙らせようとして、主からの権威をふるつて岩から水を出しました。モーセは、主がなさろうとしておられたことを自分でしてしまい、主の聖なることを現さなかつたのです。

「きよめられる」とは、自分が何者かになることではなく、神を聖なるお方とすることに他なりません。それは私たちが「御名が聖なるものとされますように」(マタイ6・9)との祈りに導くものなのです。

祈り 聖なる主よ。あなたが聖なるお方であることを常に覚えさせてください。

あなたの足の履き物を脱げ。あなたの立っている所は聖なる場所である。(15)

主は燃える柴の中からモーセに語りかけたように、ヨシユアにも「あなたの足の履き物を脱げ。

あなたの立っている所は聖なる場所である」と命じました。「履物を脱ぐ」というのは、履物を脱いで家に入る習慣のある日本人には分かりやすい表現だと思われます。それには実際に履物を脱ぐことだけでなく、「尊ぶべきものを尊ぶ」という意味があります。「土足で踏み込む」というのは、その逆で、「尊ぶべきものを無視し、傷つける」という意味になります。

しかし、聖書では「履物を脱ぐ」ことは、「権利を譲る」という意味で使われます。ルツ記によると、ボアズはナオミの夫エリメレクの地所を買い戻す権利を、より近い親族から譲り受けたので

すが、その親族は自分の履物を脱いでボアズに渡しています(ルツ4・7、8)。したがって、主がヨシユアに「履物を脱げ」と命じたのは、「イスラエル軍の将」としての指揮権をご自分に譲ることを求めたことになります。

エリコ攻略は約束の地での最初の戦いでした。ヨシユアは、主によってイスラエル全軍の指揮官として任命されていたのですが、その指揮権を主に返しました。そのことによりヨシユアは、すべての戦いにおいて、自らを主の指揮権のもとに置くという決断をしたのです。主が文字通り「主」であることを認め、その権威に服することを「明け渡し」と言いますが、「きよめ」はこのような「明け渡し」から始まるのです。

祈り 聖なる主よ。あなたへの明け渡しからきよめの道を歩ませてください。

あなたがたは、この地の住民と契約を結んではならない。彼らの祭壇を打ち壊さなければならぬ。(2)

第一コリント 10・11に「これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです」とある通り、旧約の出来事はキリスト者にとって霊的教訓となっています。イスラエルのエジプトからの解放は「救い」を、荒野の放浪は「きよめ」に至るまでの不平に満ちた信仰生活を表すと言われます。イスラエルが約束の地に入ったように、キリスト者もまた、不平不満の「荒野」と決別して、「聖霊による義と平和と喜び」(ローマ 14・17)に満ちた「約束の地」、「きよめ」に入る必要があります。

しかし、士師記を見ると、約束の地に入ったイ

スラエルが先住民族を追い出さず、彼らとまじわり、彼らの神々を受け入れ、逆に彼らに支配されるようになったことが分かります。このことは、

何の戦いもない「きよめ」は存在しないことを教えています。キリスト者が罪の「赦し」を、何をしても「許される」ことと考え、無制限に世のものを取り込んだり、キリストにある「平安」を「安逸」と取り替えて、霊的な戦いを忘れる時、征服したはずの罪が息を吹き返し、力をふるうようになり、それに支配されるようになるのです。

イスラエルが外敵から独立したのは、ダビデの時代でした。私たちの霊的勝利は、ダビデの子、イエス・キリストによる以外にありません。「きよめ」は勝利の主から離れてありえないのです。祈り 聖なる主よ。あなたにある勝利のうちに歩ませてください。

聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ちる。(3)

聖なる神の幻を見たイザヤは「ああ、私は滅んでしまう」(5)と叫びました。ヨハネも栄光のキリストを見て、「死んだ者のように、その足もとに倒れ」ています(黙示録1・17)。神の「聖さ」は罪ある私たちを圧倒します。しかし、それだけなら、私たちに「きよめ」どころか、救いももたらされることがありません。

イザヤ書で神は「イスラエルの聖なる者」と呼ばれています。この聖なるお方が、イスラエルを助け、贖うお方であり、「わたしは、高く聖なる所に住み、砕かれた人、へりくだった人とともに住む。へりくだった人たちの霊を生かし、砕かれた人たちの心を生かすためである」と言われます(イザヤ41・14、イザヤ57・15)。聖なる住

まいにおられる神は、「みなしごの父、やもめのさばき人」(詩篇68・5)とさえ呼ばれています。

神はイザヤに、すぐさま、赦しときよめを宣言し、イエスは倒れ込んだヨハネの上にその右手を置いて、「恐れることはない」と励ましています。もし、神が愛も、恵みも、あわれみも持たないお方なら、その「聖さ」は人を震え上がらせ、滅ぼすだけのものになってしまいます。しかし、神はその「聖さ」の中に大きく、深い愛を蓄えておられ、その愛は、神の「聖さ」を温かなものにしていきます。「聖さ」を持たない「愛」は本当の愛ではなく、愛を持たない「聖さ」は本当の「聖さ」ではありません。

祈り 聖なる主よ。愛を伴った「聖さ」と、「聖さ」を伴った愛を与えてください。

心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るからです。(8)

イエスは、「心の貧しい者」「悲しむ者」「柔和な者」、「義に飢え渴く者」…を「幸い」であると宣言し、それぞれに「天の御国」や「慰め」などの祝福を約束されました。その中で、最高のものは「神を見る」という祝福です。「神を見る」とは、魂の深いところで神の臨在に触れ、神とのまじわりの中に時を過ごすことで、聖書では最高の信仰体験とされています。

そして、この祝福は「心のきよい者」に約束されています。その人がどんなに有能な人であっても、多くの人々を助けた慈善家であっても、世界の平和に貢献した政治家であっても、そのことによつては、「神を見る」という幸いにあずかることはできません。「心のきよい者」だけがそれに

あずかることができるのです。「聖さがなければ、だれも主を見ることはできません」(ヘブル 12・14)とある通りです。

なぜなら、神は聖なるお方であつて、罪ある人間には神を見るのが許されていないからです。人は、イエス・キリストによつて罪を赦され、聖霊によつてきよめられ、自分のうちに「聖さ」を持つことによつてはじめて、聖なるお方と呼応することができるようになります。

この「聖さ」を持つ人は、同時に、自らの足らなさを認める「心貧しい者」、「悲しむ者」、「柔和な者」、「義に飢え渴く者」、「あわれみ深い者」、「平和をつくる者」となり、主の恵みの中で実りある生き方ができるのです。祈り 聖なる主よ。私をきよめ、「神を見る」という最高の祝福にあずかせてください。

あなたがたは地の塩です。もし塩が塩気をなくしたら、何によって塩気をつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけです。(13)

イエスは御国の子らを「地の塩・世の光」と呼びました。塩は腐敗を防ぎ、食べ物に味をつけるものです。御国の子らが「地の塩」と呼ばれるのは、世の腐敗を防ぐからです。「塩気」を保つことは「きよめ」を保つことです。この時代に呑み込まれ、塩気を失えば、神にとっても、この世の人にとっても、何の役にも立たないものになってしまいます。けれども、誰も塩の塊を直接口にすることはありません。塩は食べ物に浸透し、隠れて働くことによって役割を果たします。それと同じようにキリスト者の「きよめ」も生活に浸透し、この時代の味気のない人間関係を「おいしい

もの」にするものでなければなりません(コロサイ4・6)。

ところが「世の光」としての「きよめ」は隠れていてはなりません。その光を人々の前で輝かせるのです。それは「きよめられた自分」を「見せる」ことではなく、「きよめてくださる主」を示すことです。「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良いい行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになるためです」(16)とあるように、「きよめ」の光は、その光によって人々が父なる神を仰ぎ見、御父があがめられるためにこそ、輝かすものなのです。

祈り 聖なる主よ。自分を人に見せようとするのでもなく、人に見られることを恐れるのでもない、真にきよめられた心を私に与えてください。

天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。(45)

イエスは、ご自分に従ってきた人々に、神を「父」と呼べと教え、彼らを「父の子ども」と呼びました。キリスト者は、その信仰により、すでに、キリストにあつて「父の子ども」です。ところが、ここでは「父の子どもになるため」と言われています。以前の訳では「それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです」(新改訳第二版)となっていました。いったい、キリスト者はすでに「父の子ども」なのでしょう。それとも、これから「父の子ども」になるのでしょうか。

ここで言われている「父の子どもになる」というのは、「父の子ども」とされた者が「父の子ども」らしくなっていくことを意味しています。キ

リストにあつて「父の子ども」とされた者が本来の御子の似姿に変えられていくこと、聖霊によつて「父の子ども」として生まれた者が、同じ聖霊によつて「父の子ども」の性質を育まれることを言っています。「聖化」(きよめ)は、キリストにある立場や身分だけでなく、私たちの内面の性質までもが、聖霊によつて変えられていくことです。キリスト者はその変化によつて、天の父を示していくのです。

そして、この変化には、「もうこれで良い」という限界はありません。「父が完全であるように、(あなたがたも)完全でありなさい」と言われているように、信仰者は天の父の完全にむかつて変えられ続けるのです。

祈り 聖なる主よ。完全なあなたを仰ぎ見、完全を目指してきよめの道を歩む者としてください。

イエスは皆に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。(23)

イエスが宣教をはじめると大勢の群衆がイエスのまわりに集まり、彼らはイエスのいくところ、どこへでもついていきました。しかし、イエスがひとたびご自分の十字架を予告すると、彼らはイエスから離れていきました。信仰とはイエスのまわりに群がることではありません。イエスの「ファン」になることではなく、「弟子」となることです。イエスがどこに行こうとも、従っていくことです。

日本人の間では教会に来る人が少ないので、教会はなんとか人々の足を教会に向けさせようと思えます。それは必要なことですが、教会に大勢の人を集めることが伝道ではありません。イエスのま

わりに群がる群衆ではなく、イエスに従う弟子をつくるのが伝道です。イエスが宣教の大命令で命じたのは「群衆を集める」ことではなく、「弟子をつくる」ことでした(マタイ28・19、20)。

そして、弟子の道は「十字架の道」です。「十字架の道」とは、かならずしも殉教を意味しません。「日々自分の十字架を負って」とあるように、殉教といった特別な時ではなく、私たちの日常の中で実践していく「道」であり、それが「きよめ」の道です。日本人は「道」を大切にし、それを守ろうとしてきました。かつて「武士道」が守られたように、今日のキリスト者が「弟子道」に、「きよめの道」に生きるなら、さらに多くの人々に伝道ができるようになるでしょう。祈り 聖なる主よ。私たちに「日々十字架を負い、キリストに従う」ことを教えてください。

あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。(19)

私たちは「罪」から、「滅び」から救われましたが、同時に、「世」からも救われたのです。しかし、このことは多くのキリスト者に、正しく理解されていません。聖書が言う「世」とは、神を締め出した社会の営みのことであり、キリスト者は世から救われて神の国へと移されているのです。ですから、キリスト者には、「世も世にあるものも、愛してはいけません。∴世と、世の欲は過ぎ去ります」(第一ヨハネ2・15〜17)と命じられているのです。ところが、多くのキリスト者は、「世と世にあるもの」に愛着し、それを誇っています。天に国籍を持つものとして、神の国の基準で生きることを忘れていきます。

神の国に生きるといっても、キリスト者が人里離れたところで独自の生活をするということではありません。キリスト者は「地の塩・世の光」となるため、世に遣わされています。キリスト者、また、教会は人を漁る船となつて「世」という海に出て行かなければなりません。船は水の中に入つて行くのですが、しかし、水が船の中に入ってきたら、船は沈んでしまいます。キリスト者は世にあつて生きるのでありますが、世の原理に従い、その流れに流されて生きるのはありません。自らを世のならわしから守りながら、世にあつてキリストを証ししていきます。それがきよめの道です。

祈り 聖なる主よ。私たちを曲がつた邪悪な世代のただ中にあつて傷のない神の子どもとしてください。(ピリピ2・15)

この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていた
 だきなさい。(2)

ローマ12・2には「変化」を表すふたつの言葉が使われています。英語では、ひとつは“conform”で、もうひとつは“transform”です。“conform”は「同じ形になる」、「同化する」という意味で、ここでは「この世と調子を合わせる」と訳されていますが、それには、「この世に同化される」という意味があります。

一方の“transform”には、「別の形になる」、「変容していく」という意味があります。これは、幼虫がさなぎに、さなぎが成虫に変容(変態)していくときにも使われる言葉で、キリスト者がキリストの姿へと変えられていくことを指しています(第二コリント3・18、ガラテヤ

4・19、エペソ4・13、ピリピ3・21)。

この世の力は、キリスト者を世に「同化」させようとして働いています。その力は大きく、決して侮ることはできません。「同化」でなく「変容」。ローマ12・2は、ふたつの言葉を対比させることによって、キリスト者のあるべき姿を教えてください。ローマ12章以降は、信仰生活の具体的な事柄をとりあげ、それぞれにおいて、「同化」ではなく「変容」の道を取るようにと教えています。この変容の道がきよめの道です。私たちは、何事をなすにしても、それがこの世に同化されていく危険な道なのか、それともキリストの似姿へと変容されていく栄光の道なのかを、祈りの中で示されながら歩んでいきたいと思えます。

祈り 聖なる主よ。世に同化する危険から、絶えず私たちを守り、変容の道を歩ませてください。

ですから、私たちは、平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つことを追い求めましよう。(19)

同じ信仰を持つ者の間でも、具体的な事柄において、見解の相違が生じます。私が奉仕した教会でも、礼拝の賛美にドラムを使っているか、司会者の服装はどうあるべきかなどが議論されたことがあります。ローマ14章では、第一コリント8章と同じように「肉」を食べてよいかどうかという問題について書かれています。当時、偶像に捧げられた肉が市場に流通していたので、偶像との関わりを避けるため肉を食べないという意見があれば、すべてのものは本来神が造られたものだから、あきらかに偶像に捧げられたと分かるものは別として、市場で売っているものは詮索しないで食べて良いのだという意見もありました。パウ

ロは、そのどちらでも、それぞれの信仰の確信に従えば良いと言っています。大切なことは、意見の違う者が互いに相手を否定しないということですよ。意見が違っても「キリストが代わりに死んでくださった」(15)人として大切にし、互いの「平和」と「霊的成長」を求めます。

きよめの道は、自分ひとりが霊的な高嶺に登ったつもりになって、「あの人はまだきよめられていない」などと、他を非難することではありません。どの信仰者も共に成長を目指す信仰の仲間が必要です。きよめの道とは、個々の信仰者の間でも、教会間においても、互いを、尊び、相手の霊的祝福を求めていくことなのです。

祈り 聖なる主よ。意見の相違を超えて、あなたにある一致を与え、霊的な成長のために互いに貢献しあえるよう、私たちを導いてください。

しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。(11)

キリストの救いは人を造り変えます。パウロは、コリントの信者の中には、かつて「淫らな行いをする者、偶像を拜む者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒におぼれる者、そしる者、奪い取る者」(9～10)だった者もいたが、救われて変えられたと言っています。パウロ自身も、「以前には、神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者」(第一テモテ1・13)であつたが、救われ変えられたと証しています。すべてのキリスト者は「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」(第二コリント5・

17)との証しを持っています。

この変化はバプテスマに始まります。「御霊によつて、あなたがたは洗われ」(11)とあるのは、テトス3・5に「聖霊による再生と刷新の洗い」とあるのと同じく、バプテスマを指します。父と子と聖霊の名によるバプテスマは、聖霊がそこで働く「聖霊のバプテスマ」で、聖霊は信仰者を聖別し、聖別した者のうちに留まり、その人をさらにきよめ続けるのです。聖霊がもたらす変化は一回限りのものではありません。「御霊なる主」は信仰者を「栄光から栄光へと、主と同じかたちに」変え続けてくださいます。私たちには、与えられた「聖さ」を全うすることが求められています(第二コリント7・1)。

祈り 聖なる主よ。あなたがくださる聖なるものへの変化のうちに、私を留まらせてください。

愛する者たち。このような約束を与えられているのですから、肉と霊の一切の汚れから自分を引きよめ、神を恐れつつ聖さを全うしようではありませんか。(1)

「このような約束」とは、「わたしは彼らの間に住み、また歩む」「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」「わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる」(6・16~18)という約束です。この約束はイエス・キリストによつて成就し、聖霊によつて実現し、世の終わりに完成します。黙示録 21・3に、その完成が、「見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる」と描かれています。救われて天に至るまでの、信仰生活は、この完成の時を目指しながら

「聖さを全う」していく歩みなのです。

「聖さを全うする」というところで使われている「全うする」という言葉は、第二コリント 8・6で「成し遂げる」、8・11では「やり遂げる」と訳されています。それには、始めたことを完成するという意味があります。「御霊によつて始まったあなたがたが、今、肉によつて完成されるというのですか」(ガラテヤ 3・3)の「完成される」というのも同じ言葉です。聖さを全うするは、人間の力でできることではありません。「肉」によつてではなく、聖霊への信頼によつて可能となります。私たちに求められているのは、神への恐れと信頼です。

祈り 聖なる主よ。あなたを恐れつつ、「聖さ」の完成を目指す者としてください。

互いの重荷を負い合いなさい。そうすれば、キリストの律法を成就することになります。(2)

「きよめ」を求めるゆえに、他の人に厳しくなりすぎたり、逆に「愛」の名のゆえに、いい加減になってしまふことが残念ながらよくあります。

「きよめ」を求めることと、「愛」を保つことは決して矛盾することではないはずですが、しばしば「愛」のない「きよめ」や、「きよめ」のない「愛」が横行することがあります。

ガラテヤ6・1、3、4には、自分は「きよめられた」、「霊の人」であると自負する人に対して、「自分を何者かであるように思う」、霊的な高慢が戒められています(3)。「霊の人」であつても、誘惑に陥る危険を持つているのですから、常に自分を吟味し、人のことをとやかく言う前に、自分自身の重荷をしつかりと負っていない

ればなりません(5)。

そして、その上で、互いの重荷を負い合うのです(2)。神は、キリスト者の「きよめ」を、

「互いの重荷を負い合う」まじわりの中で達成してくださるからです。「立場が違えば、自分もまた同じ苦境に立たされるかもしれない。」そのよくな思いやりの心をもつて人を見ると、「なぜあの人は…」と簡単に人を批評することができなくなりました。問題を論評するだけでは、問題は解決しません。真の解決は、互いに重荷を負い合うところにあります。それこそが「キリストの律法」、つまり「愛の律法」を実現する「きよめ」の道なのです。

祈り 聖なる主よ。私たちに、自分の重荷を負うことと、互いに重荷を負いあうことを教えてください。

私たちはみな、神の御子に対する信仰と知識において一つとなり、一人の成熟した大人となつて、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するのです。(13)

「せいくらべ」の歌のとおり、未っ子の私は、子どものころ、兄たちの身長に届かず、悔しく思つたことがあります。「キリストの：身丈にまで達する」というのは、神の子どもとされた者たちが、「長兄」であるキリストを目指して成長していく姿を描いています。

子どもが年ごとに成長し、やがて大人になっていくように、神の子どもにも霊的な成長が求められています。そして、その成長の土台は「神の御子に対する信仰と知識」です。信じることで知ることは切り離せません。パウロが「私は自分が信じてきた方をよく知っている」(第二テモテ1・

12)と言っているように、キリストを「信じる」者は、キリストを「知る」ようになり、キリストを「知る」ことによつてさらにキリストへの信頼が増し加わつていくのです。

信仰に知識が、知識に信仰が伴うとき、私たちは子どものように、間違つたものに惑わされることがなくなり、真理を知るだけでなく、それを「愛をもって」語ることができるようになります(14、15)。ここに、個々のキリスト者の成長と聖化があり、そのようにして、キリストのからだである教会が「愛のうちに」建てられていくのです(16)。

祈り 聖なる主よ。「イエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい」(第二ペテロ3・18)とある通り、私を、あなたを知る知識において成長させてください。

キリストとその復活の力を知り、キリストの苦難にもあずかって、キリストの死と同じ状態になり、…(10)

信仰生活のゴールは「キリストの似姿」になることです。そして、「キリストの似姿」というとき、多くの人はキリストの栄光の姿を思うでしょう。確かに、キリスト者には、キリストの栄光の姿に変えられることが約束されています(第二コリント3・18、ピリピ3・21、第一ヨハネ3・2)。しかし、一足飛びにはありません。主が復活の前に十字架を通られたように、主に従う者も苦難を通ることなく栄光にあずかることはないのです。パウロはそのことをよく知っていたので、「キリストの苦難にもあずかって、キリストの死と同じ状態になり、何とかして死者の中からの復活に達したい」(10、11)と言ったのです。

パウロはピリピ2・6、7で、「キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました」と述べています。キリストの似姿を目指す聖化の道も、「しもべの姿」になることから始まります。キリスト者が目指す「キリストの似姿」は、まず「しもべの姿」なのです。

けれども、これは言うには易く、行うには難しいことです。「肉」は神の前でも人の前でも、ほんとうの意味で「しもべ」になることを嫌うからです。私たちが「肉」から解放するものは、聖霊の他ありません。いよいよ聖霊に頼りましょう。祈り 聖なる主よ。私が、あなたと同じく「しもべの姿」に変えられますように。聖霊によってそのことをなしてください。

主にふさわしく歩み、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる良いわざのうちに実を結び、神を知ることにおいて成長しますように。(10)

パウロはこの箇所で、コロサイの信徒のために「霊的な知恵と理解力」(9)と「主にふさわしい歩み」と「良いわざの結実」(10)を祈っています。聖書で「歩み」は生活を意味し、「良いわざ」や「実」は、奉仕や伝道とその結果を指します。

キリスト者の生き方は、霊的な知恵と理解力という、内面のものに導かれます。それによって「神のみこころ」を深く悟ってこそ、「主にふさわしく」「主に喜ばれる」生き方ができるので。そして、そうした生き方から、さらに主に仕え、人々に仕える奉仕が生まれます。主への奉仕や他者への奉仕は、その人の内面の知恵と理解力

に支えられ、また、日々の、主に喜ばれる生活に裏打ちされてこそ、はじめて実を結ぶのです。

9節の「神のみこころについての知識」とあるところの「知識」と、10節の「神を知ること」の「知ること」も原語では同じ言葉です。9節の「知識」は内面の洞察力によって神のみこころを知る知識ですが、10節の「知識」は、神のみこころを実践して、体験的に神を知る「知識」を指します。私たちは神のみこころを知るだけでなく、それに従って生きるとき、私たちの内に働いておられる生ける神を体験的に知ることできるようになります。そして、その神の力によって強められ、忍耐と、寛容と、喜び、そして感謝へと導かれていくのです(12)。

祈り 聖なる主よ。この箇所のパウロの祈りを自分の祈りとして、日々に祈る者としてください。

平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように。あなたがたの霊、たましい、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのないものとして保たれていますように。(23)

聖書では、「霊」という言葉は、「命」や「人格」など、様々な意味で使われますが、ここでは人間存在の最も深い部分を指しています。信仰は霊の領域に属し、人はそこで神と出会います。

「たましい」は知性、意志、感情があるところです。「霊」と「たましい」は「靈魂」といって、ひとまとめにされますが、一般には、神とのまじわりの場である「霊」の部分が無視され、人間の精神や心だけを指して使われています。それに対して、聖書では「たましい」という言葉だけ

で、「霊」も含めた人間の目に見えない部分をさすことが多くあります。「たましい」から「霊」の部分を排除すると、人とは何者かが分からなくなりません。

この箇所では「霊」と「たましい」と「からだ」という三つの言葉を使うことによって、神のきよめのわざが、人間存在の一部分だけでなく、全体に及ぶことを言おうとしています。よく「ホーリネスはホールネス」(Holiness is holiness.)と言われます。「完全に聖なるもの」というのは、私たちの全体が聖別され、聖化されていくことを指しているのです。祈り 聖なる主よ。私のすべてがきよめられるため、「霊」も「たましい」も「からだ」もあなたに献げることができるよう、導き、助けください。

ですから、だれでもこれらのことから離れて自分自身をきよめるなら、その人は尊いことに用いられる器となります。(21)

使徒パウロは言っています。「私たちは、この宝を土の器の中に入れていきます。」(第二コリント4・7) 「私たち」とは、パウロを含めた伝道者、ひいては、すべてのキリスト者のこと、「宝」は「福音」のことです。「金」や「銀」のような高価な器でも、精巧な模様が描かれた磁器でもない、素焼きの「土の器」であつても、神は、そこに福音を盛りつけ、命の糧として人々に提供してくださるというのです。

茶の湯の世界では、茶を味わうとともに、茶碗を愛でます。グルメの世界では料理を盛り付ける器を選びます。しかし、福音の場合、それは「金」や「銀」の器であつても、「土の器」で

あつても、器を問いません。福音は、器にかかわらず、自らの光を輝かせるからです。

神は器を選ばないのですが、ひとつの条件を求めています。それは「聖い器」であるということです。「金」や「銀」の器であつても、不潔なものであれば、そこに料理を盛ることはできません。きれいに洗つてからでなければ使いません。逆に、それが「土の器」であつても、きれいに洗つてあるもの、清潔なものであれば、どんな料理でも盛り付けることができます。そのように、福音を持ち運ぶ器に求められる条件は「清潔であること」で、それはキリスト者が「聖さ」(holiness)を持つているということです。

祈り 聖なる主よ。私たちは「器」にすぎません。謙虚に、きよめられることを求めることができますよう、助けてください。

霊の父は私たちの益のために、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして訓練されるのです。(11)

聖化は神のわざであって、人間の力で達成できるものではありません。しかし、だからと言って、人間の側に「きよめ」への切実な求めや、そのための訓練が要らないわけではありません。父親がその子を、この社会で生きていけるように訓練するように、霊の父も、ご自分の子どもを、神の国の民として生き、この世での使命を果たせるように訓練してください。父なる神は、その訓練を通して、信頼や服従、謙遜や忍耐をご自分の子たちに教え、それを通して、信仰者を「ご自分の聖さにあずからせ」てくださいます。神は、信仰者が信頼や服従、謙遜や忍耐を通して、神のわざを受け入れることを求めておられるのです。

信仰者の霊的訓練には、誰もが履修しなければならぬ基本的な項目がありますが、これとこれとこれをマスターすれば、かならず「きよめ」に行き着くという決まりきったものではありません。神は、ひとりひとりの信仰者を個別に、「One on one」で訓練されます。試練が思いがけない時にやってくるように、神の霊的訓練のコースも、予告なしに変更されることがあります。しかし、それは私たちの目には「突然の変更」に見えても、神にとってはすでに予定されていたものです。しかもそれは、神の父としての愛から出たものです。「きよめ」のための訓練を受けるとき、それによって神の私たちへの愛を学ぶのを忘れないようにしたいと思います。

祈り 聖なる主よ。試練や訓練の背後にある、あなたの愛を教えてください。

父である神の御前できよく汚れない宗教とは、孤児ややもめたちが困っているときに世話をし、この世の汚れに染まらないよう自分を守ることです。(27)

「きよめ」とは、自分がある一定の宗教的な境地に到達し、そこで満足を得るといふ利己的なものではありません。御霊の実である「愛・喜び・平安」は、自分が愛され、喜び、安らかでいられることに留まらず、まわりの人々を愛し、悲しむ人々に喜びを分け与え、争いの世界に平和をもたらすものです。そのように、「きよめ」も、それが他の人に仕えることをしないものであれば、本当のものではありません。

ヤコブは「みことばを行う」ことを強調しています。「ただ聞くだけ」であってはならないし、信仰を「口にするだけ」であってはならないと教

えています。本当に御言葉に聞くとは、全身全霊をもつて聞くことであり、信仰の告白は、口先だけでなく、五体を使っての奉仕となって現れなければならぬということです。

では、「みことばを行う」ということが、社会への奉仕や世にあつての活動に埋没することなのかというところではありません。世に出ていってそこで人々に仕えるとしても、その「世の汚れに染まらないよう自分を守る」ことが、信仰者には求められています。それは、主イエスの、「彼らをこの世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。∴真理によつて彼らを聖別してください」(ヨハネ 17・15〜17)との祈りの中に表れています。

祈り 聖なる主よ。私の「きよめ」が利己的なものとならないよう助けてください。

「あなたがたは聖なる者でなければならぬ。わたしが聖だからである」と書いてあるからです。(16)

15節には「あなたがたを召された聖なる方に倣い、あなたがた自身、生活のすべてにおいて聖なる者となりなさい」と書かれています。ペテロは、使徒としてこのことを命じました。これは權威ある使徒の言葉ですから、15節だけで十分な気がしますが、ペテロは、16節で、レビ記11・45を引用して、「『あなたがたは聖なる者でなければならぬ。わたしが聖だからである』と書いてあるからです」と書き加えています。そうすることによってペテロは、神の言葉がどんなに大切で、力あるものかを示そうとしたのでしょう。主イエスも、荒野で誘惑を受けた時、「…と書いてある」と言って、サタンを退けました(マタイ

4・4、7、10)。どんな場合でも、神の言葉が最終的な結論をもたらします。そして、神の言葉を口にするとき、それは大きな力となるのです。

また、ペテロが旧約を引用したのは、神が神の民に対して「聖なる者」であることを求められるのは、旧約以来の、一貫した神の、変わらないみこころであることを示すためでもあったことでしょう。キリスト者は「神の民」とされた時「聖なる者」となるように召されたのです。「聖なる者」という資質を持つことなしに、神の民としての特権を持つことはできません。聖なる者とされてはじめて、神の民としての使命を果たすことができるのです。

祈り 聖なる主よ。あなたは神の民に「聖なる者」となることを望んでおられます。あなたのそのみこころを、私の願いとさせてください。

生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、
 霊の乳を慕い求めなさい。それによつて成長
 し、救いを得るためです。(2)

「聖化」は、「新生」に続く神のみわざです。

そして、そのどちらにも、神の言葉がかかわつて
 います。第一ペテロ1・23には「あなたがたが新
 しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちな
 い種からであり、生きた、いつまでも残る、神の
 ことばによるのです」とあつて、人は神の言葉を
 聞き、信仰に導かれ、神の子として生まれること
 ができるのです。これが「新生」で、この新生を
 体験した者は、続けて神の子としての成長を体験
 します。この成長が「聖化」であり、聖化もまた
 神の言葉によるのです。

赤ちゃんは胎内では母親から酸素や栄養をも
 らって育ちますが、生まれた後は、自分で呼吸

し、乳を飲んで成長していきます。誰に教わらな
 くても、赤ちゃんは乳に吸いつきます。お腹が空
 くと泣いて求め、与えられるまで泣きやみませ
 ん。乳飲み子はじつに貪欲です。ところが、神の
 子たちは、自分を生かし、成長させる「霊の
 乳」、つまり、神の言葉に対して、なんと淡白な
 ことでしょうか。赤ちゃんが満腹するまで乳を飲
 み続けるように、どうして満たされるまで神の言
 葉を求めないのでしょうか。それは新生に続く聖
 化を理解していないか、忘れているか、聖化に対
 する飢え渴きを持たなくなっているからでしょ
 う。「生まれたばかりの乳飲み子のように」貪欲
 なまでに神の言葉を求めましょう。

祈り 聖なる主よ。きよめられ、成長するため、
 御言葉を求めます。私を貪欲なまでに求める者と
 してください。

それは、その約束によってあなたがたが、欲望がもたらすこの世の腐敗を免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。(4)

神は創造者であり、人間は被造物です。神は無限、永遠のお方ですが、人間は限りある存在です。神は聖なるお方ですが、人間は罪に汚れています。もし、「神のご性質にあずかる」ということが、人間が自らの力で「神のように」(創世記3・5)なろうとすることなら、それは、アダムが受けたのと同じ誘惑であり、神への冒瀆です。

しかし、創造者である神は、被造物である人間を「神のかたち」に造りました(創世記1・27)。さらに御子を人として世に送り「しもべの姿」(ピリピ2・6)としました。それによって、人は神のかたちを取り戻し(エペソ4・22)、
24)、「神のご性質にあずかる」ことができるよ

うになりました。人が「聖化」の道を歩むことができるのは、自らの力で神の高みに登っていくことではなく、神が、人のところに降ってきてくださったことによるのです。こうした聖化のみわざは、私たちにとって全くの神秘であって、キリストの降誕、生涯、受難、復活、昇天によってそれを解き明かされてはじめて知ることができるものです。ですから聖書は「私の福音に言うとおり、ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていない」(第二テモテ2・8新改訳第二版)と言って、キリストの生涯とみわざの中にある聖化の神秘を思い見ることが教えているのです。

祈り 聖なる主よ。あなたの聖化のみわざは神秘です。キリストによってそれを解き明かし、聖霊によって体験させてください。

このように、これらすべてのものが崩れ去るのだとすれば、あなたがたは、どれほど聖なる敬虔な生き方をしなければならぬことでしょうか。(11)

キリストの再臨は「きよめ」の動機です。再臨の時、この世のものはすべて「崩れ去る」からです。もし、私たちがこの世のものを追い求め、この世のものに従い、この世のものに拠り頼んでいるなら、再臨の日には、拠り所をすべて失くしてしまいます。「世と世の欲は過ぎ去る」(第一ヨハネ2・17)からです。再臨を待ち望むことによつて、私たちはこの世から天へと目を向け、神のみこころを行う者へと変えられていきます。

また、再臨を待ち望む者は、神の忍耐がその時を引き延ばしていることを知って、慰められ、励まされます。神が二千年の間、再臨の時を延ば

しておられるのは、「すべての人が悔い改めに進むこと」を願つてのことです。そうであるなら、再臨を待ち望む者が真つ先にしなければならぬことは、日々に悔い改めの中に生きることではないかならないはずで、悔い改め、赦されていく日々の中にきよめへの道があるのです。

さらに、再臨を待ち望む者は、すべての人の悔い改めを願つておられる神のみこころに従つて、「罪の赦しを得させる悔い改め」を人々に宣べ伝えようとしています。自分ひとりの救いではなく、すべての人の救いを祈り求めて伝道する。そこに聖化の道があるのです。

祈り 聖なる主よ。「だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられる」あなたのお心を、自分の心とすることができますように。

もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。(9)

最後の晩餐の時、イエスは弟子たちの足を洗いました(ヨハネ13・5~10)。ペテロがそれを拒むと、イエスは「わたしがあなた(の足)を洗わなければ、あなたはわたしと関係ないことになります」と言いました。私たちと主イエスとの関係は、私たちが日々、主から罪を赦されながら生きることによつて保たれるのです。

ペテロが「主よ、足だけでなく、手も頭も洗ってください」と願うと、イエスは「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身がきよいのです」と答えました。これは、私たちがバプテスマによつてきよめられていることを指しています。「足」は日々の生活の歩みを意味します。

バプテスマによつてきよめられた者も、その後にく、日々の歩みにおける罪を言い表し、赦される必要があるのです。

「光の中を歩む」(7)とは、どんな罪も犯さないということではありません。罪を犯すことがあったとしても、それを神の光の中に持つて行き、イエスの血によつて覆つていただき、洗い流していただくことです。自分の罪に気付かず、認めず、悔い改めないなら、たとえ自分では「クリスチャンとして問題のない生活をしている」と思つていても、「闇の中を歩んでいる」のかもしれない。主は今も、私たちの足を洗ってください。その恵みに留まりましょう。

祈り 聖なる主よ。日々の歩みの中で汚れた私の足ですが、恵み深いあなたの前に差し出します。洗い、きよめてください。

この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。(14)

「白い衣」は「義」や「聖さ」、また、「栄光」を表します。黙示録 19・8には「花嫁は、輝くきよい亜麻布をまとうことが許された。その亜麻布とは、聖徒たちの正しい行いである」とあつて、それは、信仰と聖さから出た「正しい行い」をも表します。黙示録では繰り返し、この「衣」を身に着けているようにと、戒められています(3・4, 5, 18, 16・15)。

そして衣を白くするのは、「子羊」であるイエス・キリストの血であると教えられています。普通、白い衣に血が着けば、白い衣は汚れてしまうのですが、イエス・キリストが十字架で流された血は、あらゆる罪の汚れを消し、衣を白くするのです。私たちは日々の歩みの中で埃にまみれた足

を主イエスに洗っていただくと共に、主から着せていただいた「衣」をも、常に洗っていただき、白く保っていただけるのです。このことは、私たちの「義」も「聖さ」も、そして「行い」さえも、子羊であるキリストの贖いから離れては存在しないことを教えています。きよめられれば、十字架が要らなくなるのではありません。むしろ、聖化は主の血によって赦され、きよめられるため、十字架に立ち返っていく道なのです。

黙示録 22・14は「自分の衣を洗う者たちは幸いである。彼らはいのちの木の実を食べる特権が与えられ、門を通って都に入れるようになる」と言っています。永遠のいのちと神の国の栄光は、子羊の血で衣を洗う人に与えられるのです。祈り 聖なる主よ。十字架を見上げる度に、そこにきよめがあることを教えてください。

不正を行う者には、ますます不正を行わせ、汚れた者は、ますます汚れた者とならせなさい。正しい者には、ますます正しいことを行わせ、聖なる者は、ますます聖なる者とならせなさい。(11)

世の終わりに、人々は道徳的にも信仰的にも墮落していきます。しかし、道徳的な墮落よりも信仰的な墮落のほうがより深刻です。信仰があれば、人は正しい道に立ち返ることができですが、信仰を無くすと帰るべきところを見失ってしまうからです。また、たとえ、世が悪くなっても、教会が地の塩、また、世の光であり続けるなら、世の中にある程度の秩序が保たれますが、教会が、その指導者も信徒も、「神よりも快楽を愛する者になり、見かけは敬虔であっても、敬虔の力を否定する者」(第二テモテ3・1~5)になってしまっ

たら、世の中は急速に墮落し、神の裁きを招くようになってしまいます。

「汚れた者は、ますます汚れた者となり…聖なる者は、ますます聖なる者となる。」世の終わりにはこの二極化が進みます。しかし、汚れた世にあっても、「ますます聖なる者となる」キリスト者がいる限り、最後の日まで悔い改めてイエス・キリストを信じ、救われる人が起こされます。今ほど、キリスト者が「聖く」あることを求められている時代はありません。聖書がはつきりと告げている時のしるしを見逃すことなく、教会は、キリストの花嫁として、「しみや、しわや、そのようなものが何一つない、聖なるもの、傷のない」(エペソ5・27)ものでありたく思います。

祈り 聖なる主よ。私たちを聖なるあなたに結ばれる聖なる花嫁としてください。

『日々の聖句』の使い方

この冊子は聖書を読み、学び、黙想するための手引で、独立した読み物ではありません。かならず、聖書を開いてその日の箇所を読み、参照箇所も開くようにしてください。

聖書の黙想には、古代から「レクシオ・デヴィナ」という方法が用いられました。それは次の四つの段階を進んで聖書を読む方法です。英語の四つの「R」を意識するとよいでしょう。

一、読む (Read) 心を静めてゆっくりと、何回でも、聖書を読みます。聖書は、神の言葉ですから、神が語っておられる声を聞くようにして読みます。

二、黙想する (Reflect) 黙想は聖書との対話です。聖書になぜこのような言葉が書かれているのだろうか。それが自分にとってどんな意味があるのか、聖書に問

い、聖書に答えてもらおうようにして、その箇所の中心的な部分を思い巡らします。

三、祈る (Respond) この祈りは、黙想によって得られたことに対する応答の祈りです。それは悔い改めや行動に結びつく決心であるかもしれませんが、あるいは、まだ解けなかつた疑問や解決していないことがらに対するさらなる求めであるかもしれません。それがどんなものであっても、正直に祈ることが大切です。

四、瞑想する (Remain) 祈りに続いて、しばらくの間、神とのまじわりに留まりましょう。「黙想」は「聖書との対話」ですが、「瞑想」は「神との対話」です。神の臨在の中にとどまることによって、御言葉が血肉となり、祈りが生活の中で実現していきます。「瞑想する」ことは神とのまじわりに「留まり」、自分自身を神の手に「委ねる」ことと言い換えることもできます。



Penguin Club

www.penguinclub.net